
佐藤の話

おいおいまじかよ俺ってうんこだったのかよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

佐藤の話

【Nコード】

N7005R

【作者名】

おいおいまじかよ俺ってうんこだったのかよ

【あらすじ】

取り敢えず主人公の名前は佐藤

それ以外は全く未定でどう動くかは俺にもわからん

その時の思いつきで進めてますん

チートになるかもミステリーになるかもホラーになるかもバトルになるかもギャグになるかもシュールになるのかも

まあそんな小説で頼む

0 (前書き)

勿論 g d g d になるし勿論不定期

というかあれだもうあんまり読んでる側への気遣いはしないことに
したんだよね

まあ感想貰ったら返すけど

つまりは糞つままない駄文でも書き続けるってわけだ

どうしよう。死にそう。

いや心配する必要はおそらくない。

今俺の前で起こっている出来事はおそらく今この文を読んてる君たちとは別次元のことなわけだ。

ていうか死にそう、寧ろ殺されそう。

はあーどうしようかなあこれは困ったなー。

「なにか怪しい行動取った者は直ぐに撃ち殺すからな」
いやーどうしよう。

なんか黒い服着た奴らがサブマシンガンらしきものを片手になんか脅してんだよね。

そしてここは多分学校の教室、勿論自分のクラスの。

「どこの中二病野郎の妄想だよ」

「おい次喋ったら撃つからな」

あー怖い怖い。

つまりは「ちょｗｗｗｗテロリストが学校来たｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」
みたいなスレとりあえず立ててくるか。

てかあれだよな、こういうことするメリットはなんなのかな。

女の子を片っ端から食べていくのかな？

まあなんかメリットがあるんだよねきっと。

俺としては関係ないよね。スルーでいいよね。

ほらもうサイレン聞こえてくるしさー、とんだ無計画だなこの三下共は。

「あーいいやもう片っ端から撃ち殺しましょうゲーム開始ー」

短い爆撃音が連続として響く、銃特有のあの臭いが充満する、女子は悲鳴をあげてく、男が暴れだす。

なるほどこれは面白い、はっはっは。

やがて俺以外が全員床にキスをしている形になる。

意味わからんなんでやねんどういうこつちゃー。

「■■■■であつてるよな？ついてきてもらおう」

そう言つて俺の手に本来は警察が使うであろう手錠をかける。

まさか俺の人生で手錠にお世話になるなんて。

あーてかそういうことかよアメリカンジョークかー、ゲームも冗談かー。

「しかしお前みたいなどこにでもいそうな奴がこの世界の最高権力者■■■の息子だとはなあ、この世界もよくわからんようにできてるな」

俺の周りには五人、これで全員じゃないだろうな。まあとりあえず

「はいはい阿呆乙」

こいつら全員を殺した後に素早く逃げれば大丈夫か。

「おまえらが阿呆な理由そのいちー。こんな普通な質の手錠で俺の手を拘束できると思つてたことー」

俺の腕力舐めてんのか。こんなん意味を成すわけねえだろ。

「そして理由その二ー俺の身体チェックをしなかったことー」

迅速に俺が学生服の胸ポケットに常備している大型ナイフを二本取り出す。

「そして理由そのさんー俺の親父が只者じゃないんだから俺だつて只者なわけねえだろーってことー」

まず回転するように一番近くに居た二人の首を確実に切り裂く、その回転の勢いを利用して両方のナイフを一番遠い黒服の首に投擲する。

残り一人、そいつがあつけにとられてる間に飛び膝蹴りの容量で頭に膝打ちを素早く打ち込む。

そしてそこから離れるのも忘れない。

スナイパーの可能性を考慮して取り敢えず学校に入る。

ここまで五秒も掛からない。

まあこんくらいは出来なきゃすぐに殺されちまう。

実はこんくらいの事ならもう何回も経験していたりする。

少なくとも10回は超えているが、途中から数えるのがめんどくなくて数えていない。

そんな事を考えながらとりあえず外部と連絡が取れそうな職員室へ向かう。

「おいおいすごい血が大丈夫か!? みんなはどうした!？」

そろそろ職員室へ着くな、という位の距離の辺りの階段からその声を掛けられた。

担任の松下だ。簡単に言うと今は珍しい熱血系の先生である。

「ああ大丈夫です、これ返り血なんです。」

「そうか!なんだよかった!」

なにがよかったんだろう、この糞教師は。たく暑くるしい奴だ。

「俺がお前を殺せるのか」

うわまじかよ。

なにやらいつの間に松下の手には黒い掌サイズ金属の塊のあれがこちらに向けられた状態で構えられていた。

おまけにその拳銃から撃った後の硝煙が銃口から煙草の煙のように漂っていた。

つまりは俺に向けられて撃たれていた、音がしなかったのはなにか細工が施してあるからだろう。

畜生。あーほんと甘かった。なんで教師がいるのかとか、内部にテロリストがいる可能性とか、なんで考慮しなかったんだろう。

まあすぎちゃったことだ。

「まあ腹撃たれちゃったし潔く死ぬがな、親孝行な俺はおまえら全員殺すよ」

余裕の笑みを浮かべて言う俺。ちょい口から血が出てるのがアレだが、今の俺は最高に輝いているぜあっははは。

「どうやってだ?」

勝ち誇ったように両手を肩の上に持って行くお馴染みの馬鹿にしたようなジェスチャーを取っている。

馬鹿が、直ぐにその表情崩れさせてやるよ。

「これをよく見るんだな」

そう俺はあるスイッチをもっていた。

勿論起爆スイッチだ、この学校に100程趣味で仕掛けていた爆弾の。

「はいそうなんです。余裕で後も残さず全部破壊できます」

「なつやめ」

「言い訳は聞きませーん。ぼっかーん」

呆気なくポチッと巫山戯たような音とともにそこら中から爆発が始まる。

これでみんな死んでみんなハッピーエンドだね！！やったねたえちやん！

「『『『『『これは酷い』『』『』『』」

今どうやら私は拷問を受けているようです。

体罰だ。そうだこれは体罰というものだ。

・・・もういいだろ反省してっから早くノート返せよ。

「まあいいがまたこういうのノートに書いてくれよ。授業のモチベーションが上がるかもしれないからさ」

・・・

畜生・・・ニヤニヤしゃがって。

次はばれない用に書こう。

じゃそろそろ授業の続きするぞー、と松下はまた黒板に数字の羅列を書き始める。

「それにしてもまさかお前にあんな妄想癖があっただなんて驚きだよ。しかも最後の方はほんと適当だったな」

隣の水モが顔を異様に近づけて話しかけて来やがった。

あまりそれには触れないでくれ水モ。ついでに顔をもっと離してくれ。

「ああ悪い悪い、これはどうやら黒歴史になりそうだな」

そのようだ。もうこれはネタにもできないからスルーの方向で行く。

もうわかってるだろうけど一応状況説明。

担任の松下が俺が暇だった為授業中に書いた「やべｗｗｗｗテロリストが学校来たｗｗｗｗｗｗ」を朗読し始めたのだ。

確かに俺も悪かった。だがそこまでする必要があるのか？

俺達はもう高校の二年だ（因みに季節は夏）。全くこの位のことならちよっと注意すりゃ俺だって反省してばれないように周りをよく見て慎重に書くであろくに。

全く以て非効率だ。

「おい、（キリッを忘れてるぞ」

なんだ、また俺声に出てたか。

「全く佐藤はほんとにひとり言が多くて気持ち悪いよな」

お前はなかなか傷つくことを言うんだな。

普通の友人Y君です。別にむかつくから名前を隠してるわけじゃありません、これはフラグです。

そしてあっさり名前がでましたね俺の名前が。

佐藤なんです。

下の名前は敢えて言いません、フラグです。

「またひとり言か ■ ■」

おiiiiiiii友人のYてめえ折角名前出さなかったのに！！今は伏字にしとくからな！

「う、うん。・・・どうした？」

別になんでもないさ、はっはっは。

無視されてしまった。

きつとなにか危ない物を感じたであろう彼は優秀だ。

そんな優秀な彼の名前は八代光希ヤシロミツキという名前での人生を歩んでいる人間である。

基本思ってること全て口に出る俺と仲良く？してくれている数少ない俺の友人だ。

万能タイプ。

ついでにさっきの水も紹介しよう。名前は一応ある川上という。

だが、何故か知らないが話しかけてくる時は基本的に顔を10cm未満の距離で近づけてくるから水モというあだ名になった（というか名前が普通過ぎて渾名の方が板についてる）。

だが実は川上こと水モは女子にも偶に話しかけるのである。そして彼はイケメンである（基本的に俺の知り合いにはイケメンしかいない、ラッキー）。つまり彼はよく女の子に告白されるという。しかし全て断るという。

なるほど水モだ。

ホモタイプ。

そんな事を考えていたらどうやらもう後五分で授業は終わるようだ。よし寝よう。

「・・・ほんと佐藤君って勿体ないよね」

「・・・ねーイケメンなのにもぶつぶつ言って気味悪いからねえ」

くっ・・・うるさい糞ビッチ共が！聞こえてるぞ！！
もういい寝るっ。

「おーい後五分なんだから少し位頑張れ！。後お前の声も聞こえてるぞー」

・・・やべ。女子こっちみんな。

「お前はもう少し女子に対する認識を改めろ」

「松下、珍しくまともな事言っんだな」

「黙ってるビッチ」

だが俺も同感。

「なんだお前もビッチか」

残念俺は男だ。

「黙れこの」

キーンコーンカーンコーン

「はいーいじゃチャイム鳴ったので終わりにしまーす」

「起立、礼」

奴は最後に何を言おうとしたんだろう、怖くて今日も寝れないな。それより今何時間目だ？ああ

「五限目だ」

六限が終わったのか。

いや待て何故今貴様は嘘を吐いた？

「？嘘を言っちゃいけないのか？」

悪い忘れてた、そういえばお前はそんな奴だったな

「いやなにを言ってるんだ俺は今日はイメチェンをしてきているんだぞ」

どこらへんがイメチェンなんだ？

「まだ嘘を吐いてないだろ？」

なんだと・・・？

ちよつと焦って時計を見る。

時計の針は長い方が5を刺しており短い方が3を刺していた。つまり

「ひつかかりやす過ぎワロタ」

「はっはっは」

トイレいこーっと。

おつと一応彼の名前を出して置こう。

自称詐欺師の佐久間だ。

これで帰りのショートホームルームを終わりにしまーす起立ー礼ー、
という恒例のやりとりがされてから三時間後。

偶に友人の家に行くが今日はいつも通り俺は家でゲームをしていた。
因みに今嵌ってるのはスーファミの聖〇伝説3である。

「うへえこれ小学生位の頃にやんなくてよかったわ。トラウマにな
る」

軽く説明すると大体のステージのボスがグロイまたはホラーなので
ある。

だがこの年ならいいエンターテイメントだ。他のシリーズもそのうち
買おうとかそんな事を考えてたら何故かというか何故かほんとに
わかんないんだが急にこんな事を思った。

そうだ本を読もう。

思い立ったら吉日、直ぐにmyバイクで本屋に行った。

なにやらいっぱい本があるなあれから読めばいいのやら。

ん・・・？へえー、これって本の方が原作だったのかアニメはすっ
ごい好きだったがしらんかったなー！。

お、これもか、あれこれも？いっぱいあるんだなー！。

よし金ならバイトのおかげでいくらでもある。知ってるのは全部買
うか。

結局その日は化〇語に生徒〇の一存に涼宮ハ〇ヒの憂鬱というまあ有名どころを買った（全巻）。

よーし帰ったらすぐ読むぞー。

「うわなんだあいつ気狂いか？すごい独り言」

「なんか怖いから警察呼ぶ？」

・・・さつさと帰るか。

ひっどいなーもうちよつと独り言が多いだけで気狂いだなんて。

これだから金髪DQNにビッチは嫌いなんだよなー、全員死滅しろっ！

ああ大丈夫だバイクに乗ってる間に思ってることだから奴らには聞こえない筈。

ほどなくして帰宅。

なにこれ面白い。

一ヶ月後ある男子高校生の無駄に広く特に趣味もなく殺風景だった部屋がラノベだとか難しい専門書だとか色々ジャンルに入り交じった本棚に埋もれていた。

こんなおもしろいものがあつたなんて・・・本という物に全く興味がなかった頃の自分を殴りたいぜ・・・

ふむ・・・一応知ってる本屋の本は全部買ったし読んだしなー・・・。

いやーでも結構多かったな、この俺が一ヶ月寝ないで（一応飯は食った）ずーっと集中するなんて相当すごい量だったんだな。

取り敢えずネット世界に行ってみるか。

小説 読むでggつてみるks。

「小説を読もう！」だと・・・？

以下略

次の日。

よし俺もなんか書いてみるか！

1 (前書き)

ちよつとノリで地震も加えてしまった
まあどうでもいい話だ

やべえ、学校行かなきゃ。

俺が欠席数でもう進級が危うい高校生みたいなことを呟いたのは、本を読み続けて一ヶ月した後に何か書こうと決意の様なものをした2秒後だった。

つまり前の話の直後。

てか今頃気づいたがうん。地震が起こったみたいだ、結構大きめの。それと異様に頭が痛いし体が動かん気がする& a m p ;眩暈。

カロリーメイトしか食ってなかったからか。

まあどうでもいい話だ。

地震の処理をせねば。

なんかもうリビングとかに行って思ったがこれは酷いな。

大体の家具が倒れてる。が、ふむどうやらそれでも震源地はもうちょい遠くだったみたいだ。

因みに私の住まいは日本海側の東北地方です。

だが親の心配は仕事の都合で海外だから必要ないし、まあ問題ないか。

寧ろ俺が心配される側か、いやだがあの親のことだから私達の息子がそんな柔な事で死ぬはずがないとかふざけ切ったことを言って心配はしてないんだろうな！。

取り敢えず割れてるガラスとか処理しなきゃ。

やべえ、学校行かなきゃ。

そんな以下略なことを思ったのは部屋の掃除という名のガラス処理だとか家具の処理が思ったより時間が掛かって時計の短い針が八を指している時だった。

まあ明日行きゃいいんだが。

そんなことより久しぶり晩飯作るかな。一ヶ月ぶりに水分ある食事が喰えるな。

頂きます。

テレビを見ながらあったかそうに湯気を立てる米と味噌汁とおかずと新鮮味が見られるサラダ（つまりは今晚の飯）に向かって何かの儀式をするように手を合わせてそう言った。

手作りではないのだが。

なんてたつてうちには今机とちっちゃい椅子と俺の部屋の本棚以外の家具はないのだから、適当に買ってきて無事な皿に並べただけだ。それにしてもなんだなんだ、ニュースばかりだな。

つまらんなーバラエティやらんのかとか結構被災者な筈だがちよつと不謹慎なことを考えてたら、

「地震が来ます地震が来ます」

とテレビから機械めいた声が聞こえた（というか普通に機械音声なんだが）。それを境にアナウンサーの人が慌てた様に注意を促しはじめてた。

・・・って東北地方やないか。

大変なんだなー。

ちよつと揺れてる様だが今の俺の家には家具など存在しないので・

・いやテレビがあつた。

ちよつと焦つたが、いやそうだテレビにはなんか底にシールみたいなのを貼つてあるから唯一壊れなかったんだ。

つまりは焦る必要もなく飯を喰い初めてた。

因みに机はすごいミニな物を使ってるから問題無し。

震度6 辺りだろうなー。

飯も食い終わったしさっさと明日の学校の準備を始めないと、とか初々しいことをしたら直ぐ寢床に着いた。

次の日。

コケッコツコーとかゼルダの○説っぽい擬音が聞こえてきそうな程
晴れ渡る空の今日。

俺は寝坊した。

ふっ。焦ることはない俺様はもう一ヶ月も無断欠席をしているのだ
ぞ？今更遅刻の一つや二つ遅刻など（笑）みたいなものだ。

「なに朝から阿呆な事言ってるのよ早く学校行くわよ」

（。D）

（。D）

（。D）

その時俺はこんな顔をしていたと思う。

なぜならその少女は。

何故なら。

なぜなら。

ナゼナラ。

その少女は、

「いやなにちよつと西尾っぱいシリアスな雰囲気を書き方してんのよ。只の幼馴染でしょ」

俺の恐るべき幼馴染なのである。

久しぶりな気がするな我が宿敵。

「そうね一ヶ月ぶり位かしら。全くの音信不通でちよつと心配したわよ」

平然とした顔で嘘を吐くという嫌な詐欺師（詐欺師は大体は嫌な奴だが）みたいな事やってのける奴が幼馴染である。

「可愛いんだからいいでしょ？ほら幼馴染っていうヲタク男子が誰もが羨む位置関係の娘が目の前にいるのよ。もつと喜ばないよ」

君はとても面白い冗談を言うんだな。はっはっは。すまない思わず笑ってしまったよ。

いやそんなことよりだ、何故俺がヲタク男子だと思った。

「いやこの部屋この部屋」

といって俺の部屋の全方位というか主に本棚に目を配らせた。

「なによこれ、一ヶ月も籠ってこんなの読んでたの？」

馬鹿め貴様はこういった本の素晴らしさを全く分かってないようだな。

きつと近い未来そういつていた自分が憎らしくて殴りたくなってくるぞ。

いや違う、なにもオタクな本だけじゃないだろう良くみる。ほらこれとか結構有名な論文だぞ。

そう言いながら本棚の奥の方からなにか自分でもよく考えたら意

味がわからない様なタイトルの本を取り出す。

「・・・取り敢えず学校行きましょうか」

どうしたのだ、なにか苦虫でも噛み潰したような顔して。
学生なのだからこういうのも読むといい。

「早く準備しなさい」

そうしよう。

だが今日は俺が優勢な様だな。

いつもは君が凄く嫌な奴に見えたが今はゴミ屑に見えるぞ。

「もしかしてキャラ変わったかしら」

冗談だ。

登校中、歩きである。

ここで私が通う学舎について少し説明しよう。

普通の学校である。

それはそうと我が幼馴染よ、近況報告頼む。

「名前を呼びなさいこのゴミムシが」

それはそうと渚よ、近況報告

「私の名前を呼びなさいと言ったのよ」

？

あ、悪い悪い普通に名前間違えた。

いやそんなことよりCLANNADは神だよな、あれは泣いた。

「近況報告ー学校でちよつとした事件が起きましたー。その犯人に貴方が疑われてますー」

へーちよつとした事件ってことはなんか無くなったとかか？

「ええ亡くなったわよ」

そっちのか！！そっちの亡くなったか！

ってかちよつとじゃないじゃん！それに疑われるって結構あれじゃん！！

「嘘です」

あれデジャブが・・・

そういえば学校に詐欺師もう一人位いなかったっけ？

「いやそれ私の兄だから」

はー道理で似てるわけだー、・・・いや騙されないぞ。

なんでお前と幼馴染なのに奴とは只の友人止まりなんだ。

「はっはっはー赤の他人でしたー」

本題に戻ろう。

「そんな彼が何者かに殺されましたー」

はあーまああいつ嘘ばかり吐くからなー、しょうがねえんじゃねえの？

「いつの間にイケメンな幼馴染がDQNになってて私とても悲しいです」

全くそろそろ本当の事を言いなさい、もうそろそろ学校着くんだから。

「では本当の事を言います」

「貴方は学校で自殺しました」

ふむ学校に着いた様だ。

どうやら俺は自殺した様だ。

あれ？なんか体が軽いよ？

もう行かなくちゃいけないみたいだね・・・

じゃーな我が幼馴染よ。

「嘘

やっぱり嘘か。危うく自分でも無いのに昇天しちゃう所だったじゃねえか。

じゃないけどね」

そうか、じゃ学校入るわけには行かなくなってしまうわけだ。

「あら？昇天しないの？」

さっきのはネタだ馬鹿野郎、ちゃんと体もあるんだしな全く問題ない。

「その割にはちょっと浮いてたけど・・・」

まあそんなことはどうでもいい話だ。

俺が推理するにだな、それは俺以外の奴が死んでるだろう。

只動機が全く掴めないな。只の嫌がらせか？

「嫌がらせで自らの命を犠牲にする人なんて、素敵な根性持つてるわね」

全くだ。

とかまあ結構冗談も交えながら校門の前で坦々と会話してるという今の時間帯にはいないのだがもしいるのならばちょっと通行人に迷惑なことをしていると案の定声が掛かる。

「おいいそこで何をしてんだーもう授業始まってんぞ」

国語のゴリマツ・・・！

「いやそのネタちょっと伝わりにくいから、実際私もうる覚えだか

ら」

「ギャグマンガ日和新刊なかなか出ないよな」

ほら魂の共鳴をしていればこんなコミュニケーションなんて余裕で取れるのさ。

「てかお前・・・佐藤じゃないか？」

あつやべ。

「彼は今は亡き彼の従兄弟の石江君です。生前彼とは凄く容姿が似通ってる所から結構仲が良くて彼が自殺されたと聞いてその現場を確かめたくて来たそうです」

流石渚、頭脳系。だが石江って誰だよ。

「そうか・・・なら悔いが残らない様にちゃんと見ていつてくれ石江君。校長には俺がいつとくから」

はい・・・ありがとうございます・・・（泣

俺も必死に一芝居打ってみる、が。

くそう隣の野郎は必死に笑いを堪えてやがる。

まあどうでもいい話だ。

教師からの許可も降りたし（実はこいつ担任の松下）、さっさと現場に行きますか！。

「というかこういう土壇場の時は思ってる事口に出さないのね」

実は独り言を言うのってキャラ作りの為だったんだ。

スタスタスタと二人は綺麗な姿勢を保ちながら飄々とした態度を以て現場に向かっていった。

この時偶然遅刻して隠れながら話を聞いていた第三者である川上はホモ思ったのであった。

（いや絶対嘘だろあれ！だって最初の頃の会話ギャグマンガ日和とか言ってたじゃん！！あれギャグマンガだよ！？なんで彼の死を悲しんでる従兄弟からそんな言葉が出てくるんだよ！騙される松下も松下だけだな！あとその後の台詞聞いちゃったよ！佐藤のあれってキャラ作りだったのかよ！！ちよつとショックだよ！というか二

人の歩き姿無駄にかっこいいなおい！！）と。

一人変な流れで真相を知ってしまったホモ（川上）は息を荒げて必死にツツコミを出していた。

「まあいいやもう・・・教室に行こう」

ここか、血の痕が結構生々しいな。

場所は簡単に言うんなら人気の無さそうな校舎裏、まあ適当に想像してくれ。

まあ血なんて輸血パック使えばいくらでもごまかせるけどな。死んだのはいつだい？出来るだけ詳しく。

「実は私もあんまり知らないのよね聞いた限りだと今から一週間前早朝五時辺りにこの辺を通ったら血溜りができてそれに校長が気づいたわけで、つまり第一発見者は校長らしいんだけど」

もうまるつきり掴めないね。

謎がいつぱいだどっから解いていきやいいのか・・・

「とういかなんで一ヶ月も休んでたのよ・・・まるつきり意味わからないわ」

・・・ああここでまた一つ謎が生まれたようだ。

「どうぞどうぞ」

なんでこの学校の奴らは俺が学校来てないのに少しも疑わなかったんだよ。

寧ろなんで俺が態々学校で死ななきゃいけないんだよ。

「確かにそうね気づいたらみんな受け入れてたわ」

はあー自殺ってそんなもんかねー！

「とういか貴方この前まではもっと普通のキャラだったからじゃない」

影が薄いとでも言いたいのかこの尼。

いやうん事実だ、事実ならばしょうがない。

「影の薄いキヤラは基本的に一週間で忘れられるわ。まあその事象は結構記憶に残るもんだけどね」

つまりはなんか自殺事件起こったけど死んだのだれだっけみたいな？

「その通り、それに一応血液からDNAだとかなんとか調べたらしいしね。疑う必要もなかったんじゃない」

渚はしゃがみこんで俺（仮）の血の痕をなぞるように指を滑らせる。
はぁーん、じゃまあそこはスルーといこうか。

さて一番の謎だが、なんで俺に完璧に変装といか変形だとか、まだわからない方法だが俺のDNAと同じ血液使ったりとそこまでして俺が死んだという事実を伝えたかったかだ。

「まだ人間に知覚されていない技術が関係してたりしててね」

立ち上がりおどけたように古泉君のあの動作又はドンキーコングのあの動作を目を細めながらする。

あのポーズは実際相当寒い。

因みに俺は腕を組んだままの壁に寄っかかるといっピッコロさんっぽいポーズを維持している。

まあどうでもいい話だ。

やっぱりそれ以外で考えるとしたら意味のわからない嫌がらせとしか考えられないな。

「まあその技術云々はほつといてこういう考えはどうかしら？」
なんだいってみる。

「誰かが貴方の命を完璧に無くす用に狙ってるこの人をAさんとしましょう。そして何がなんでも死んで欲しくないBさんがいます。」
人差し指だけを空へ突き出して何かを提案するように続ける。
ふむふむ。

「BさんがAさんに君が殺されない様にするにはどうすればいいと思う？簡単な方法じゃ絶対無理だとして、例えば警察に頼って話をもし通じたとして警察の全機能を持っても絶対に殺されるとも」
ても」

日本の有力な国家的機関を敵に回しても殺されるか。

ああなるほどなるほどね。

「そうBさんはこう考えるでしょうね。君を死んだことにしてその後どうにか偽装すれば貴方の命は結果的に守られる」

なんかターミネーターみてえだな。

「ターミネーター？」

なんかあのロボットもめっちゃ頑張って守ってなかったけど、未来で活躍するであろう主人公を。

でもあの物語じゃ未来で死んだかどうかわかるから今回話した作戦はとらなかつたようだな。

「なるほどね、確かにちよつと似てるわね。実際未来のロボットなんて来てもそんな簡単に死なないでしょうけど」

未来からのロボットならあの青たぬきの方が好みだな。便利だし。ちよつと話がそれだな。

というかその話だと偽装される筈の俺がまだ偽装らしきこととされていないんだけど。

「いやそれはわからないわね。もしかしたらもうなんらかの方法で偽装されてるかも」

それも可笑しい話だ。本人に全くコミュニケーション取らないで意図的にAさんから隠すのは無理じゃないか？

「まあそれもなんらかの理由があるんでしょうね。もしくはBさんが何らかの妨害で偽装出来てないとか」

ぞつとするようなことを言うんだな。

少し背筋に悪寒が走った様な気がしたからここにきて姿勢を変える。ジヨジヨ立ちを試してみた。

詳しく言うなら、左手はパーにして掌を顔側に向ける様にして小指と薬指の先端辺りを口元に持つてくるようにする。右手もパーにして腕は伸ばしてやや下を向ける下斜め45°くらいにして掌は後ろ側を向ける。ポイントは体を上手く曲げることだ。詳しくは「ジヨジヨ立ち」で検索。

「・・・話を続けるわよ」

引かれた気がした。

だがこのポーズは続けるぞ俺は。

まあその話がもしあってるんだったら俺はそろそろ死ぬことになるな。

「まあ悪魔で仮説よ。もしもの話だわ」

でも他にこの話の解釈のしようあるか？

「只の悪戯」

としてはありえないんだよ。

「全く謎が多い事件ね。魔術師とか関わってるんじゃないかしら？」

あつたらしいねそういう展開。でもそういうのって基本的に俺に特殊能力あるんだけどな」。

すこし脱線したな、気を取り直して行こうか。

校長に聞き込みしてくるか。

「そうね頭ばかり使っていてもあれだしね」

そういつて伸びのような事をし歩きだす。

それを合図にしたかの様におれもジョジョ立ちを解いて、歩きだす。

正確には歩きだそうとした。

今俺は殺された。

だが体は普通だ、特に問題は見当たらない。

渚の方も特に問題はないようだ。

「ねえなんか今殺されなかった・・・？」

そうでもないようだった。

わかんないことがあつてちよつとした事を先生に聞くようなそんな感じで尋ねられた。

まあいいや、特に問題ないみたいだし予定通り校長の所へ行こう、

この死んだ感覚は歩きながら話そう。

ああ問題と言えば何故か渚がちよつとくつついて歩く用になったというこつぐらいなんだが。

俺そんないちゃいちゃしてる場合だろうか・・・？

4（前書き）

久しぶりだな貴様ら

今現在、俺達は校長室に向かって移動中である。

一応変装らしきことはしている。髪の毛をワックスでオールバック。ちよつと渚に笑われた、いやちよつとというか爆笑だった。

まあいい。

さてなんなんだろうかさっきの感覚は。

「例えるとしたら、」

殺された以外に思いつかないな。

「じゃあどう殺されたと思う？」

わかんね。

「そうね同意見だわ、問題はそれで外部又は内部からの影響はあるかないかになってくるんだけど」

といって渚は軽く周りを見渡しと自分の体をちらみしする。

なさそうだな。

因みに今は休み時間中の様なので普通に生徒と合うが、変わった対応は取られていない。

偶に話しかけられるし姿が見えないとかの外部からの影響もなさそうだ。

「まあ外部からはね。内部はまだ確定はできないわね」

え？何故だ？

「ファンタスティックに、オカルティクに言うなら、もしかしたらさっきの感覚で不思議な能力が使えるようになったとか」

ねえよ。

と自分で即否定して思ったが、もしかしたらそんな非現実的な事もあるかもしれない。

渚も俺と同じように俺を否定する。

「100%無いとは言えないわね。大体今回は普通の理論では説明できないことがいっぱいじゃない」

まあ確かに、明らかにおかしい点がいくつもある。

「例を上げるならまず動機からしておかしいわね」

それにDNAだとか、いやそれは鑑定する医者がどうにかすれば
いけるか。

まあそれは保留にしておこう。

もしなにか能力的な物が芽生えたのだとすればそんな面白いことは
後にとっておいた方がいい。

「メインディッシュは最後につて？私は最初に一番好きなものを食
べる派なのよ」

まあ結果的にこの話は後つてことになったわけだが。

「そうね第一発見者の校長さんにお伺いしましょうか」

・・・因みにメインディッシュは最後ではない、最後は確かデザー
トとかだった筈だ。

まだまだだな。

「失礼します」

そう凜として響くような声で入室していった、一応俺も失礼します
と適当に言い入っていった。

ここで新しく出てきた登場人物のご紹介である。

小振なナイフを一本を校長の心臓に当たる位置に突き刺している。

ミスターXさんです。

そう校長はXさんに殺されていた。

え、これどうしようとかそんな思いを目に乘せつつ渚の方を見た。

渚の方はこっちみんなといった気な視線をこちらに向けていた。

(どうしよう)

(私に聞かないで)

（選択肢は二つ。逃げるor戦うあと道具と仲間）

（一つの間違いじゃない？）

（俺もそんな気がする）

そんな幼馴染とのアイコンタクトの末に出た結論は、

「勿論逃走」

勿論逃走。

同時に踵を返し校長室から出る。

ここまでの間一秒弱。

そこからはとりあえず外に向いダッシュする。

「メインディッシュとやらの使いどころじゃない!？」

こういう土壇場で能力使える奴なんてアニメと漫画とラノベの主人公及びその登場人物だけだっ!

「やっぱりさつき確かめといった方がよかったんじゃない!」

起きてしまったことをうじうじ言うとは渚らしくないじゃないか!

「五月蠅いわね!声発してる暇があるならもっと早く走りなさいよ!」

言われんでもわかってる!

そんな軽口を叩きながら逃走し続けてやっと出口の前まで来た所で、

「しかしまわりこまれてしまった!」

ここで選択肢はまた四つに別れるわけだが、戦うor道具or仲間or逃げるorその他!どれにするよ!

「全部!」

渚は道具の持っているカバンをXに投げつけた!

Xはひらりと身をかわした!

渚と佐藤は逃げた!

しかしまわりこまれてしまった!

渚は仲間の佐藤をXに向け投げ飛ばした!

佐藤の捨て身斬り!

Xはひらりと身をかわした!

佐藤 に 50000 の ダメージ ！

佐藤 は 死んだ

渚 は その他 を発動した ！

X に 100000 のダメージ！

X は 気絶 した ！

いやおかしいから。 いやおかしいから。

「どうやら戦闘が終わったから生き返った様ね」

いやそのシステムFFだけだから！ドラクエだと棺桶状態だから！

「なんかシリアス展開に持っていけないわね・・・」

そ、そうだな。無理矢理シリアス展開に持つて行くとしたらだが。

その他つてなにをしたんだyo・・・

「魔術よ」

なるほど。

どうやら渚はアニメ、漫画、ラノベの主人公および登場人物に属するタイプの人間なようだ。

5 (前書き)

今日は気分が乗るしもいつこ出すぜ！

「なんかね実は殺されたって感覚からなんかすごい不思議な力の波的な何かがすごい体の中を巡ってるのよね」

ほうほう、続ける続ける。

「その力みたいなのを実は移動中にまあ色々試して見てたのね」

ああいいぞ続ける。

「それでまあ校長室に着く頃には大体自分の能力というか力を理解してたのね、それでわかった力がね・・・」

焦らすな焦らすな、番組構成的にはグッドだが。

「光をいろんなエネルギーに変換できるみたいなのよね」

なんかあれだな、あのー中二な・・・

「全くその通りなわけなんだけど中二な能力程強いよ。例えばほらアクセロリータさんとか」

まあ同意だな。

それに光なんてその辺に溢れ返ってるもんな、応用性抜群なわけだ。
「そういうこと、逆に光がない空間なんてこの世界には存在しないんじゃないかしら」

んでどうここに転がっているXさんを倒したんだ？

「そうね光っていうのは常に何かに反射してるのはしってる筈よね？その反射してる光を重さっていうエネルギーに変換させて、まあ簡単に言わせれば衝撃波みたいなものね。それで気絶させたわけ」
うん、よくわからん。

つまりはあれだろ？重さのあるものをあいつに光の速さで上から落としたって事だろ。

「そういうことね」

あれ？光の速さでってことは・・・

なんであいつ生きてんの？

そういつて俺は床に横たわっているなにも拘束されてないように見

えるそいつを指さす（さっきの容量で常に光を変換して圧力にして動けないようにしているらしい）。

「いやあー私もあれでもうぐちゃぐちゃというかぺっちゃんこね、になると思ってたんだけどね。彼はどうやら頑丈のようで」
すっごいな。いやすっごいな。

光の速さってどんくらい知ってるのか、秒速三十万kmだぞ？星すら壊れるレベルだぞ。

ちよつと一回「お前のうんこで地球がやばい」でぐぐってみろよ。

「やつぱりオカルト的なのが混ざってるようね、なんか防壁的なのをしてたんじゃない」

さっすが魔術、光の速さも諸共しない。

ってかお前のもって魔術じゃなくね？異能じゃね？寧ろ人外じゃね？
「そんなもの便利だからいいのよ。問題はこれからどうするかよ」
そういつて周りに目配せする、つられて俺も周りを見渡す。

無人の教室、人気のない廊下、音の無い学校。

「なんでやねん」

なんでやねん。

「それは私が人払いの魔法したからですよ」

男の透き通るような綺麗とってはあれだがもの凄く綺麗な声が音のない学校の玄関に響いた。

男だったんだ。

なんか全身黒いコートで隠してた& a m p・白と黒が使われている不思議な仮面があったからわかんなかったぜ。

「なんで圧力かけてんのに口動かせんのか？」

「なんででしょうね」

挑発するようにニヤリと笑う。

ってかあれ？仮面いつの間になくなって。出た、俺の知る男大抵イケメン説。

「まあいいわ、もうちよつと落ち着くところで詳しく聞き出しましょう」

おk、超展開だがおk。

「そんな予定通りに進むわけがないじゃないですか」

「なっ・・・！」

おおなんか少しずつ彼の体の輪郭が薄れていくぞ。

お前・・・消えるのか？

てか俺こんな蚊帳の外で大丈夫か？

「少しだけ情報を与えておきますね、私は貴方達の味方に属する人間です。後さつき貴方達が外で話してたじゃないですか、あの推論殆どその通りですよ、それで私は言わばさっきの話のBです。あああとその君ももう能力みたいなありますよ。まあ他にも言い足りない事があるんですけど、時間がないんで失礼します。また合いますよう」

そう言って消えていった。

・・・早口だったな。

「すごい早口ね」

そこには何故か今の光景を静かにうるさく見ている人影があつた。
（ちよつと忘れ物したから取りに来たらこんな不思議な光景だよ！
俺そんなありきたりな理由で魔術だとかさういうすつごいのを見ち
やつて良かつたのかよ！）
ホモ
皆さんご存知の川上君である。

（つてかそんなすごい存在だったら俺が今こうして見てた事も知ってたろ！なんで俺消されないんだ！？いやこれはもしかしてあれか？もしかしてあれなのか！？）

そんなことは露も知らず。

俺と渚は放心状態のような感じでぼーっとながらとりあえずうちに帰った（家具のない殺風景な俺んちへ）。

そして帰宅。

玄関ゾーンに入りちよつとだけ見慣れている風景に戻つた瞬間、
 なんでやねんっ！！

「なんでやねん」

元の状態に戻った。

大体なんなんだよあの美形！明らかにラスボスっぽい感じの雰囲気
を醸し出してるのに味方かよ！！

つかなんだよ味方とか意味わかんねえよ！俺達は何と戦ってるんだ
よ！

「・・・オカルト的ななにかでしょうね」

もう！！世紀末オートルト学院乙！

「とりあえず状況整理しましょうか」

お、おお流石我が幼馴染こんな時にも冷静頓着、いや流石。
取り敢えずリビングまでついて来たまへ。

もういるッ！

光の応用流石！

「まあ座りなさい」

椅子一個しかないのに何言ってるんだよ！！

さっさとどけばか！

「だが断る」

まあいいや、うんいいや。

しょうがないと、適当に諦め我が幼馴染にひれ伏す様に地べたに座
る。

畳ではないけどそんなに堅いものではない。

さて本題。

「そうね、これからどうするか。よね」

普通に過ごす。

異議のある者は手を挙げなさい。

「異議あり！！」

ビシッって聞こえてきそうなほど素早く指をさされた。

・・・どうぞ、次からはちゃんと手あげて下さいね！。

「やってみたかっただけよ」

おふざけがすぎますよ、ザーボンさん。

「私ドドリア派なの」

どっちでもいいんだよ!!

で、異議はあんのか!?

「無いって言ったじゃない」

じゃあ今日は解散! 終わりはいい!!

又来週も見てくださいね!!

ジャンケンポン!! (フレミング右手の法則)

はっはっはっは!! 私勝ちだひれ伏せ愚民ども!

はっはっはっは!!

いやーほんと申しわけないうんうん、反省してるつもりな感じだわ。うひひ。

ああ今はもう髪型オールバックではない。

さっきああ言って風呂に行って三十分のんびりしてたらこのざまだよ。

「話を続けましょうか」

高圧的な感じで話しかけてくる。

シリアスモードかい？

んで少し戯けながら返す俺。

「真面目な話をしましょう」

うはおk、そしてサーセン。

で、どうするよ。

「やっぱり私達にはどうすることもできないんじゃないかしら」

その通りだと俺も思う。

つまりはさっき言った通り流れに身を任せると？

「それはその通りなんだけど任せ方もあるでしょう」
ほう。

「具体的に言うと、情報が欲しいわけよ」

つまりは次に情報を得るような機会があったら意地でも取りにいきやなきやってことが。

「その通りよ。そしてその機会があるのは、」

ここで俺がベストタイミングで口を挟む。

またあいつと会ったときだな。

「その通り、なんだか映画のワンシーンみたいね」

俺も思っただぜ。

だがそれが何時になるかだなー……。

全く検討がつかない。

「そうね・・・少し予想がつくとしたら、また次なんらかの問題が起こるときが妥当でしょうね」
「いつべりーあばうと・・・」

だがそれが妥当の様だなー。

「気を張っていきましようか」
「そうだな。」

解散でおk？

「お風呂借りてくわね」

・・・まあいいだろう。

そして

のんびり。

してると必ずと言っていいほどトラブルはやってくる。
今回もそうでした。

（ピンポン）

そのトラブルはそんな間抜けな音と共に来た気がした。

ああ・・・んだよもう折角の俺ののんびりタイムを・・・。

はいはい、今出ますよ。

「やあ久しぶり」

うわ懐かしい。

「二ヶ月ぶり」

いや普通に一ヶ月だから、嘘つかなくていいから。

てか俺死んだんじゃないの？

「いや」

ああーいいやお前に問答を問いかける事が阿呆だということだったな。

「賢くなつたなわが息子よ」

いやお前只の詐欺師みたいなクラスメートだから。

おいおいまさかこいつも変な問題に巻き込まれてるんじゃないよな・

・

とか思いながら、というか祈りながらもそんな願いは既にブレイクされてる訳なんだけど。

兎に角願いながら、詐欺師みたいに嘘ばかり吐くこいつにツッコミを一応食らわすという談笑をしていたら。

こいつは、佐久間は談笑の途中で脈もなくこんな事を言った。

「ああ佐藤、私はどうやら魔術という物を身につけてしまったようだ」

嘘だといいなあ、とか思いながら俺はとりあえず頬をかいてた。

7（後書き）

とりあえず最初に名前出したキャラをとりあえず出しておこうと思
った

8（前書き）

久しぶりだな貴様らふうーはははは！
はい、そうなんですシュタゲにはまってました

・・・う、嘘だといいなあ。

わかってる、わかってるんだ・・・こいつがこの後何を言うかなんて。

「嘘だけど」

ダウトだよ。

「うんノーコメントで、なんか狼少年化してるから今の俺は何言ってもあれな気がする」

ふーんお前にしてはえらく真面目な事言うんだな、ちょっとだけ見直したかもよ。

「まあ事が事だから」

そういつて苦笑した佐久間の顔が異常にかっこよくて惚れそうになったのが印象的だった。

というかいわゆるギャップ萌えだった。

お前いつつもそういう顔してた方がもてるぜ多分。

「こういうのは偶に見せるからいいんだよ、いわゆるフラシーボ効果ってやつだ」

なんか違う気がするが言いたい事はわかった。
要するにだからギャップ萌だろ？

いやてか新鮮だな、なんか今日のお前は。

「混乱してるのかもな」

やはりか。

「まあでも全部嘘だけだね」

やはりか。

ほんとにお前は・・・ふあつく。

そういつて別れの挨拶を済ませようとしたら、

「あら？佐久間君じゃない」

おい待て。

渚これはどういうことだ。

「なにがよ？」

すぐくエロイです。

「ノーコメントで」

そう、つまり渚は風呂上がりな訳で、バスタオルを巻いてるだけなわけで、エロスな訳で。

あれ？ここっっておれんちじゃなかったっけ？

「いや私の家だけど」

「は？ここおれんちだろ何言ってんだよお前ら」
なるほど。

つまり渚お前は服を着てこい。

「はい」

佐久間お前は黙れ。

「だが断る」

解散ッ！！

「あ、佐久間君面白い話してたわね。ちょっと詳しく聞かせて貰いたいんだけど」

「嘘をついてもいいんならいくらでも話してやろう」
もうお前ら帰れよ。

忘れてたが渚と佐久間の関係性について話しておこうと思う。

と、言っても特に明記することはない訳なんだけど、端的に言うんなら気あいすぎでしょあんたら。

つてくらい仲のいい奴ら。

両方性格捻じ曲がってるから。

でも恋愛関係には発展しない、いつだったか聞いてみたら二人とも「こんな最低な奴に自分の大事な部分見せれない」と。

つまりどちらとも一々気を張らなければいけない訳で、なんだか納得できたけど。

そんな話である。

そしてこんな回想を、もとい現実逃避を続けている今もその気の張り合いをしてる訳で（オレンジ色に光る玉を七つ集めると願い事が叶う物的な気ではない）。

お前達の話はマジでめんどくさい。

「俺もそう思うぞ詩該^{しがい}」

「私もそう思うわ佐久間君」

実は渚は本名じゃ無かったのでしたの巻。

渚もとい詩該^{しがいこころみ}が我が美しき幼馴染の本名である。

実は名前なんてどうだっていいのだ、その場のノリで決めてしまうのが殆どである。

今回はちよつと人生というギャルゲに嵌ってちよつと渚って名前をつけてみた。

脱線したが、こいつらがなんの話をしていたかと言うと勿論今俺達に向き合っている大よそ非現実的な魔術的な話だ。

まあ・・・大体は予想が着くであろうが、以下がさっきのやりとりである。

「どんなことができるの？」

「なんだと思う？」

「知らないわよ早く質問に答えなさい」

「少しは考えろお前は頭いいはずだ」

「考えなくてもあんたに聞けば即解決でしょうが」

「その通り。ではお教えしよう私の戦闘力は53万です」

「戦闘力なんて聞いてないのよ、早くいいなさい」

「なんだと思う？」

以下似たようなループである。

よし一旦みんなで寝ようか。

「・・・エッチ／＼」

いいんだよお前はそこで変にリアクションしなくて！！

「アッ」

あれお前ってそんなキャラだったっけ！？

そう俺が言いたいのは落ち着け餅つけという事だ。
休息を取ろうということだ、いい提案だろ？

もう夜も遅いし。

「そうなのよね実はもう12時回ってるのよね」

「気がついたらもうこんな時間かー」↑棒読み

お前らの話が長いからだよ！そして俺が吞気に回想に浸ってると同時に卑猥な妄想をしてたからだよ！！

それはちよつとあうあうな妄想だから書いてないけど！

「あ、私そろそろ着替えるわね」

「うむいってこい、目のやり場に困ったぞ全く」

まじかよ！！（ピンポーン）

何故か来客を知らせる何か嫌な予感のするベルと俺のシンプルなツッコミはびっくりするくらい同時だった。

正直眠いのにな、一波乱の予感だよ畜生。

8（後書き）

また気が向いたら書きにくるお

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7005r/>

佐藤の話

2011年10月8日20時25分発行